

研究ノート

## 在日百年のファミリー・ライフストーリー 河家の場合【第五部 地域社会と同胞社会の一員として】

猿 橋 順 子\*

### 1. はじめに

現在、焼肉店「千里」がある東京世田谷の土地は、今から百年前の 1925 年、河永俊（ハ・ヨンジュン）さん（1889～1961）が朝鮮半島の全羅南道、光州から下関を経由して、辿り着いた場所である。それから百年、今は三、四、五世代が、ひとつ屋根の下に暮らしている。

家族の来し方をファミリー・ライフストーリーという手法上の提案をしながら編み、本稿で第五部となった。第一部では河永俊さん夫妻の渡日から焼肉店「千里」の創業（1965 年）まで、第二部では河永俊さん・金松亭さん夫妻の長男、河應烈（ハ・ウンリョル）さん（1929～2003）の来歴と第三世代となる河孝成さん（1949～）・崔英愛さん夫妻の世代への継承までをまとめた。第三部は河永俊さん夫妻の子ども達の中で、唯一ご存命の河末子（ハ・マルチャ）さん（1936～）の語りをまとめた。第四部は河永俊さんから見ればひ孫の世代となる、河明樹（ハ・ミョンス）さん（1977～）と尹慧瓊（ユン・ヘギョン）さん夫妻の民族楽器ソヘグム奏者としての歩みを記した。

聞き書きは 2021 年から継続して取り組んでおり、2025 年はまさに河永俊さんの渡日から百年という節目の年で、千里開業 60 年の特別な一年だった。

---

\* 青山学院大学国際政治経済学部教授

この節目というものは、感慨深いものである半面、家族の日常は他の歳月と変わることなく流れる。一日は一日で変わりなく、一年は一年で変わるはずもない。しかし、だからこそ節目には意味がある。というよりも、どのように意味づけるかを節目は我々に問うてくる。

第五部は河家の第五世代の誕生から現在までをまとめた。河家について知ろうとすると、家族を取り巻くたくさんの人々との出会いにつながった。家族の物語は家族だけのものではなく、むしろ家族以外の者から語られることによって理解が深まるということがたびたびある。本編にはそのような声も収めている。

## 2. 第五世代の誕生

明樹さんと慧瓊さんがCD『HIBARI』をリリースした2年後（2008年）、男の子を授かった。侑臣（ユシン）と名づけた。慧瓊さんが響きから名前の音を決め、漢字は意味や姓名判断の画数を考慮しながら、ふたりで考えた。「侑」は「人を手伝ってあげる、人に勧める」という意味。「臣」は王の前で下を向いている様子を象った漢字で「王に仕える」という意味もあるが、より広く「人を受け入れ、人に寄り添える広い心をもち、謙虚に生きて欲しい」という願いを込めた。

この時期は、これから進むべき道について試行錯誤、紆余曲折があり、迷うことも、試してみることも多かった。金剛山歌劇団を退団したことで、仲間たちと集まって練習する場所も機会もなくなってしまった。音楽を合わせるには、ある程度の広さと防音設備の整った場所が必要だ。

その頃、明樹さんの母校、東京朝鮮第八初級学校は閉校となり（2005年4月廃止認可）、校舎だけが残っていた。その器楽室を練習場所としてしばらく使わせてもらえることになった。そこにはグランドピアノもあり、練習には申し分ない場所だった。いよいよ校舎が取り壊されるという時、明樹さんは、そのグランドピアノを阿佐ヶ谷にある東京朝鮮第九初級学校に移設した。後に侑臣くんが通うことになる学校である。学校の多目的室には、今もその救い出さ

れたグランドピアノが置かれ、学生達が弾いている。

侑臣くんが東京朝鮮第九初級学校に入学した時、同級生は9人だった。学校へは一年生から六年生まで毎朝、明樹さんが車で送り届けた。片道30分の親子のドライブ。特に何を話すというわけではないが、同じ空間で一緒に時を過ごす。ちょっとした気分や体調の変化を伝え合える時間である。

卒業式の時、子から親に漢字を一字贈るという企画があった。

明樹さん：慧瓊は笑顔の「笑」という文字をもらっていたのかな、確か。それを見て、私はどんな文字がもらえるんだろうと思って、うわあって見たら「送」って書いてあって、大爆笑。「あっしーじゃないんだから」って。(笑)……でもまあ、小学生の侑臣から見た父親が「(車で)送ってくれる人」だったとして、6年間、毎日それができる親がどれだけいるだろうかと考えたら、それはそれでかけがえのない、大げさかもしれませんが、親子の信頼関係の基盤ができた時間だったんじゃないかなって、私は思っているんです。

帰りのお迎えは慧瓊さんの担当。夫婦で連携して侑臣くんは無欠席で六年間、皆勤賞をとった。

中学校に進学した時、日本の学校を選んだ友人もいたし、日本の小学校から新たに入ってきた子もいた。朝鮮学校の中では、日本語は使ってはいけないのだが、日本の小学校から来た子も一年ぐらいで馴染んでいるようだと言っている。

朝鮮学校は、朝鮮語を継承する場所として重要である。河家の人たちも、親族や友人たちも、韓国朝鮮の文化を生業にしている人たちはとりわけ、口をそろえて「朝鮮学校で言葉を学ぶことができたから、この仕事ができている」と言う。河家の人たちは日常的に朝鮮語と日本語を切り替えながら暮らしている。だから、朝鮮学校は言語習得の重要性ももちろんあるが、自分のルーツが当たり前のように肯定される環境の中で、のびのびと過ごして欲しいという思いが

ある。

侑臣くん自身は、朝鮮語について、「自分のルーツの言葉だ」という風に考えたことはあまりない。ここは日本で、日本語さえできれば普通に暮らしていける。家の中もすべて日本語で何の問題もない。ただ、日本語以外の言葉ができるのはいいことだと思える。サッカーの合宿で平壤に行った時に、相手の話す朝鮮語のスピードが速くて怖じ気づいてしまった。最初は聞き取れなくてもどかしい思いをしたけれど、短い滞在期間の間でも日一日と聞き取れるようになっていって、相手の言っていることがわかるようになっていく。そういう変化が嬉しかった。参加できる世界が、他にもあると感じられるのはいい。だから英語も身につけたいと思っている。

中学に入った時から、民族器楽部に入り、両親がやっているソヘグムを始めた。他の民族楽器も見たり聞いたりさわったりしてみて、カヤグムやテピリも面白そうと思ったこともあるが、「やっぱりソヘグムがいい」と思ったのである。毎日の練習が大切だということは、両親の姿を見ていてよくわかっている。それでもリビングのソファで好きなマンガを読んでいると、あっという間に時間が過ぎていく。一日の中で、このくつろぎの時間と場所が一番お気に入りなのだ。「さて、そろそろ練習」と思うと「もう遅いから寝なさい」と言われてしまう。朝、早起きすればオモニと一緒に練習できる。頭ではわかっているが、朝はどうにも起きられない。親は起こしてはくれない。「やる気があれば起きられるはずだよ」と言われ、まったくその通りだと思う。だから、没頭するほど好きにはなれていないけれど、それでももうしばらく続けてみようと思っている。

家のリビングのソファの他に、もうひとつ好きな場所がある。朝鮮学校の民族器楽部や民族管弦楽部<sup>1)</sup>の部室だ。通っている朝鮮学校の部室はもちろん使い慣れているが、これまで、小さい頃から両親の公演について日本各地の朝鮮学校に行ったことがある。部室を訪問することもあったし、両親が準備など

---

1) 初中級までは民族器楽部、高級学校になると民族管弦楽部となる。

をしている間、部室でひとりで待っていることもあった。どこの朝鮮学校に行っても、部室はどことなく似ている。楽器が置いてあるというだけではない。床の感じ、壁の感じ、漂っている空気がどことなく似ていて、初めて訪れた場所なのに気持ちが落ち着く。安心できる場所だ。

### 3. 一里からはじめる

明樹さんが千里の三代目オーナーシェフになろうと決意したのは、必ずしも前向きな理由ではなかった。2008年のアメリカのリーマン・ブラザーズの経営破綻に端を発する世界金融危機、いわゆるリーマンショックによって、演奏の仕事が激減したことも理由のひとつだった。結婚をして一児を授かった。一家の長として家族を守らなくてはならない。そのためには安定した収入基盤が必要だ。

明樹さん：店を継ごうと思ったきっかけはいろいろあります。ひとつには、演奏の仕事をしていると 日本各地、海外も、美味しい料理に出会う。4日連続で焼肉ということもありました。子どもの頃はあまり焼肉は好きでなくて、「カルビなんて嫌い」っていう子どもでした。味わって食べるというよりも、身体を大きくしたいから、お肉とライスと牛乳を無理して摂取するという感じで、偏食だったんです。生ものも嫌い、野菜も嫌い。ところが演奏の仕事で、好き嫌いを言っていられなかったり、美味しいものに出会ったりする。新鮮な魚介類とか。気づいたら好き嫌いを克服していました。家に帰って焼肉を食べた時に、「あれ？うちの焼肉美味しいな」と気づいたのが20代でした。

店を手伝いながら演奏をする。そうすると周りの人たち、お世話になった人、師と仰いでいる人、同業の人、先輩、いろんな人から「この味も守ったら？」「両方やったら？」と言われる。平壤の申先生は、さすがに「とんでもない」と否定するかと思っていたら「焼肉もやればいいじゃない」とさりとらわれたんです。

包丁を持ちたくないというジレンマもありました。一度、怪我をしたことがあって演奏ができなくなってしまった。東日本大震災の年（2011年）でした。だから料理も細心の注意を払って、集中して取り組むようにしています。

千里の三代目となる前に、修行を積まなくてはならない。他店に雇ってもらうということも考えられようが、明樹さんは千里の定休日にひとりで「一里」を開業するというアイデアを思いついた。

明樹さん：初日のことはとてもよく覚えています。冬の寒い日で、店を開けたら雪が降っていました。……最初は予約の電話で「はい、焼肉千里です。今日は一里の日です」と言うと、ガチャンと切られたこともありました。「その店はどこにあるんですか？千里の裏ですか？」と聞かれたりすることも。

最初は、友人に来てもらったり、母に食べてもらったりしながら「一里」の切り盛りをした。母は、厨房に立つことと味に対しては厳しい。味が安定するのに、3年かかった。徐々に一里の日を目当てに来てくれる人も出てきた。同業者、料理人、近所の人にも来てくれるようになり、美味しそうに食べてくれるようになっていった。

2011年の東日本大震災がきっかけのひとつとなり、耐震補強をかねて、大がかりなリフォームを敢行した。その時に頼ったのは、韓服の制作・販売を手がける「パランセ」代表の清原さんである。最初、地域のリフォーム会社に依頼したところ、日本の居酒屋のような案ばかり持ってこられてしまい、途方に暮れた。河家のみんなが心に思い描くような韓国朝鮮テイストを言語化し、形にするには……「パランセサジャン（パランセの社長）に相談してみようよ」、誰ともなく出た意見に誰もが賛同した。連絡をすると、忙しい仕事の合間を縫って千里に通い、施工業者と千里の間に入り、丁寧にきめ細かくコミュ

ニケーションし、リフォームを完遂してくれた。

清原さんは、新潟生まれ、英愛さんの遠い親戚でもあるが、親戚だからとか、生まれが一緒だからというよりも「センスと心意気と交渉術」に全幅の信頼を寄せており、何かと相談する心強い存在なのである。年齢的にも孝成さん・英愛さん夫婦と、明樹さん・慧瓊さん夫婦の間の世代にあたるので、双方の世代の気持ち、時代の変遷による感性の違いをわかってくれる。

清原さん：この（千里の店内の）壁を、「ただの壁じゃなくて韓国らしくしたい」ってオモニが言って、話しているうちに「仁寺洞（インサドン）で見た石堀みたいに」ってイメージが湧いてきたんです。「そうしましょう」と言って注文したら、最初、施工業者が作ってきたのが違ってたんですよ。偶数段と奇数段はすこしずつずれていないといけない。「これじゃあ違います、伝統模様じゃないんです」って言って。これひとつ取っても、なんか表現したいっていう気持ちがあって、その気持ちを込める。（千里のリフォームでは）そのお手伝いをさせていただきました。



図1：千里店内の壁

とはいえ、清原さんは服飾業界の人で、リフォームもインテリアもまったくの素人、畑違いである。料理店の改装には働く人達の動線もよく吟味しなけれ

ばならない。それでも英愛さんが清原さんをお願いしたのは、漠然としたイメージを対話によって言語化していく作業、業者との交渉術、そして何よりも親身になって最後まで寄り添ってくれる人柄を見込んでのことだった。

清原さんは三十代半ばでチョゴリのデザインと製作を手がけるようになった。朝鮮大学校卒業後、しばらく母校でもある新潟の朝鮮学校で教員を勤めた。韓服のデザインの道にいざなわれたのは、姉がやっていた婚礼関係の仕事を「手伝って」と頼まれたことが直接的なきっかけだったのだが、「なぜ」を突き詰めて考えてみると母の影響が大きかったように思うとふり返る。

清原さん：うちのオモニ（母）は花を一輪生けるんでもなんか違うんですよ。いいな、いいねって感じさせる。どこから、どうしてと聞かれたら、やっぱりそこかなあ……

服飾の専門的な訓練を受けたわけではなかった清原さんは、まず韓国の市場や問屋を練り歩き、布地や縫製に関連することを足と手と耳と目で学んだ。門前払いされることも、足元を見られることもあったが、親身になって丁寧に教えてくれる人ともたくさん出会えた。手をさしのべてくれる人達の手をしっかりと掴んで、今がある。「失敗だって数え切れないほどしましたよ」と朗らかに言う。

英愛さん：パランセのチマチョゴリはデザインとか色使いがもちろん素敵なんだけど、着ると安心するの。着心地が良くて安心できるチマチョゴリ。信頼できる。だからなんでも信頼してお任せ。

清原さん：リフォームは経験ないから。笑

英愛さん：いや、壁紙を決めるのひとつ取っても全然違う。色とか質とか。「韓国っぽい」って私たちも感覚的にはあるんですけど、それを言葉で「こういう風に」って表現したらそうなるっていうのが、私らには無理。色にしても韓国の黒にはいろんな黒がある、オレンジでもいろいろなオ

レンジがあって、朝鮮の木や花の色で、それぞれに言葉がある。グレーでも、黄色でも、韓国の色味。日本語の色の世界もそうなんでしょうけど、その韓国の色味を日本語で表現する、説明する、交渉する。こだわりのをもって、追及していく。そういうのをずっとやってきているのを近くで見て聞いているから、お願いしますって、お任せしたんです。

英愛さんが韓国旅行をしている時に、たまたま仕事で清原さんも韓国にいて、合流したことがあるそうだ。清原さんの「韓国的なイメージと、日本で生まれ育った感性を融合させながら、新しく個性的な作品を産み出していく」発想力、それを実現させるための「語彙力、表現力、話術と交渉力」に、英愛さんは感服している。一方で清原さんも、韓国で英愛さんが連れて行ってくれた料理屋の味、「このかくし味は」と微細な違いに気づく感度、「いいな」と感じたところを取り入れようとする英愛さんの料理人としての探究心を尊敬している。

それは、明樹さん、慧瓊さん夫婦が追求している音楽の道にも重なるのだと清原さんは語る。

清原さん：僕も明樹や慧瓊と同じように朝鮮学校で小学校1年生から「学校では朝鮮語をしゃべりなさい、日本語は禁止です」という中で暮らしてきて。その時、あの時代（1960年代）は、日本の在日を助けてくれたのは北だったんです。そのお陰もあって朝鮮学校が整備された。今、僕が韓国語で仕事ができているのも、僕がその時に韓国語、朝鮮語を覚えたからで、その朝鮮語がなかったら、社会に出てから韓国語を覚えてチョゴリの仕事をしようとは思わないですよ。その時に、学校に楽器とか、教育資金を送ってくれたのは北なんです。僕は政治的に北は支持していないですよ。支持していないですけど、でも素朴に、純粹に、この民族の楽器に触れてごらんって送ってくれた。そういう楽器が何百個もあって、カヤグムとか。そこのピュアな気持ちも絶対に嘘じゃない。嘘じゃないということが受け取る側にもわかるんです。

そこで小学生、本格的には中学生くらいから明樹も慧瓊も（ソヘグムを）やりだしたと思うけど、楽器を、高校卒業の段階で、すでにプロ並みのクオリティまでやってのけるという……そして、その国のアイデンティティをしっかりと演奏している。しようとして全力で取り組んでいる。その考え方や目指すところが、私のチョゴリを作る姿勢と重なる部分が多いんです。今では明樹も慧瓊も、民族楽器ソヘグムの第一人者になりました。日本に生まれて、日本に居ながらにして自国の文化に触れながら育った私達なので、やっぱり民族の音楽、楽器の音色を聞くと、涙が出ちゃうんです。

服飾、料理、音楽——専門はそれぞれ違えども、在日コリアン、朝鮮学校出身者として共感しあえる思い入れがある。葛藤も困難もあるが、あきらめない粘り強さがある。それは先生から学生、先輩から後輩、親から子へと受け継がれてきたものでもあるし、後輩達、若い世代に残してあげたいものでもある。

#### 4. 二足のわらじを履く決意

明樹さんは今でも「一里の日」は続けており、「一里の日」にしか提供していないメニューを目当てに来てくれる人もいる。

明樹さん：いまだ道半ばですけど。お客さんが回るように、つまり安定的に来てくれるようになりました。お客さんの安定が味の安定なんだってわかりました。

猿橋：そうですか、今、何里ぐらいまで来ましたか？

明樹さん：今何里？うーん、0.5 里。

猿橋：やだ、減っちゃってる。(笑)

明樹さん：そういう気持ちでいようということで。(笑)

謙遜する明樹さんだが、千里の三代目オーナーシェフという肩書きも板につ

いている。二代目孝成さんの引退のきっかけのひとつは、デジタル・トランスフォーメーションと総称されるデジタル化だと孝成さんは言う。

孝成さん：コロナ以降やってない（店に出ていない）です。もう引退。電子マネーになったり、注文が iPad になって無理だになって、今が納め時だになって。

英愛さん：ちょっと早いですね。

孝成さん：やっていることは見てますよ。言わないだけ。

明樹さんは、ソヘグム奏者としても活動を続けている。ロールモデルとなるような人物はいない。

明樹さん：ソヘグムのフリーの奏者は私たちがはじめてだと思います。だって、私より前の時代は、プロからすると「壊れたヴァイオリンの音」と言われて、待遇が一番下の楽器だったんですから。民族楽器の中で「真っ先になくなるのがソヘグム」と言われていたんです。そういう言葉を聞くと悔しくて。

猿橋：不安になったりしませんでしたか。

明樹さん：ああ、不安はなかったですね。いいって思っていたんです。この楽器はすごいんだって心から思っていたんです。目指す音色もありましたし。

「心からいい」と信じられていたのは、申律先生の演奏に触れていたからでもある。

演奏家であることと、焼肉店のオーナーシェフであること、二足のわらじを履くことについての思いは複雑な時期もあった。今でも簡単なことではないと思っている。今の自分を肯定できるようになるまでには、いろいろな葛藤、周りの人からの声かけ、見守りがあった。

明樹さん：演奏一本だったら今の自分はないなって思うんです。お店がここにしっかりあること。自分でやるようになって、演奏と別の基盤がある。動じない基盤がある心強さをもらいました。一昔前は「二足のわらじは履いちゃいけない」とか、「二つを選ぶなんてどうなんだ」という風潮が今より強くあったと思います。自分の中にもありました。

今の時代だからこそ、選択できる道なのかもしれない。また、焼肉店が「基盤」と思えるようになったのは、店の存在そのものだけではなく、経営者として、料理人としての経験を積んだ今の時点だからである。もちろん常に難しさや葛藤もある。公演活動がある時は、両親に店を任せて行かせてもらっている。子どもの世話も願う。住居と店舗が同じところにあり、両親と同居しているからできることである。そして何よりも両親が音楽を続けることを肯定し、応援してくれている。

それでも、オーナーシェフとして店を守らなくてはならない。アルバイトスタッフを育て、彼ら同士の人間関係にも気配りが求められる。うまく調整ができず、公演への出演を断らざるを得ない時もある。そんな時は、ものの見方を変えることや、自分自身に課題を課すことで平常心を保つようにしている。

明樹さん：両立が難しい時もあります。そういう時は「それはそれ」と考える。駄目な時は駄目。執着しない。そういうジレンマに直面した時、一番大事なことは「自分を磨くことだ」と言い聞かせて。自分がどれだけ磨かれているかがそのまま出ます。料理も音楽も。だから練習は毎日欠かさないように、自分ができることを精一杯やる。そう思って一日一日を過ごしたら、自分の中で無駄はないと思ってるんです。演奏に行けた自分。行けなかった自分。そこで止まるわけではない。私を求めてくれる音があって味がある限り、自分なりに守っていれば、どちらもついてくると信じています。だから、楽器の演奏家であり、千里の三代目オー

ナーシェフとして二大看板を堂々と掲げようと思います。

残念な思いをした時こそ、自分磨きのチャンスであると捉える。一日一日を大切にしながら、歩みを止めない。そうしていれば結果は自ずとついてくる。行雲流水のごとく、今までの積み重ねが今を作る。ただしストイックになって内に籠もるようなことはしない。ユーモアも大切だ。それは心のゆとりを確認する指標でもある。

明樹さん：「焼肉は趣味です」って言うんです。

猿橋：えええ？

明樹さん：ほら、そう言うとみんなびっくりする。「店が本業で演奏が趣味」と言う人はたくさんいるでしょう？だから逆のことを言う。「本業は演奏家です」って。これは冗談ですけど、そう言えるということが自分に余裕が出てきた証拠かな。「両方やっていいのかな」と不安な自分だったらこういう風に言えません。こんな風に話せること自体が変化した結果です。昔の私はこういうことを「あまり人に言うもんじゃない」という考えがあったんです。でも言葉にして伝えないと伝わらない。言わなくてもいいことかもしれない。でも言っても言わなくてもいいことなら自分は言おうと思う。それに、言うと言責任が生じるじゃないですか。言っちゃったらやらなくちゃいけないってなる。

猿橋：家族にも言いますか？

明樹さん：家族には……あまり言わないですね。勝手にやっちゃう。勝手にやってるって思っているかもしれません。両親が健在でいてくれる。環境が変わればどうなるかわからないけど、感謝しています。ありがたい。おおいにこの環境を使って楽しんじゃおうって、楽観的で楽天的ですね。

それから、明樹さんの代からはっきりさせたことがある。河家では、それまで仕事関係の必要から河本（かわもと）と通名を使うことや、河と書いて

も「かわ」と読ませることもあった。今でも、昔から知っている人は「河本さん」と呼ぶ人もいる。本来の呼び方で、「ハ」を一貫して名乗るようにした。そうしてみると、今度は「日本語がお上手ですね」と言われるようになった。在日コリアンの存在や歴史をまったく知らない日本人の無邪気な発言に戸惑うこともある。

明樹さん：「そうですか、ありがとうございます。日本語の方が『お上手』なんです。ここで生まれ育っていますから」と切り返せるようになるまでは、それなりに時間がかかりました。

悪意のない、無邪気な「褒め」の背後には、日本社会の無関心と無理解が広がっている。それを責めることはできない。その人、個人に咎はない。かといって聞き流すだけでは何も変わらない。相手の褒め言葉をそのままの形で返すことで、受け取った側の違和感を表明する。感度の高い人ならば、己の発言の不適切さに気づき、省察することだろう。「察しがいい」と言われる日本人に、この機微が伝わるだろうか。

## 5. 地域の一員、世田谷区民として

三十代後半の頃、明樹さんは在日本朝鮮青年商工会（青商会）の渋谷・世田谷支部の会長をつとめた。世田谷区の区民祭りや渋谷区の区民祭りに韓国・朝鮮の料理を提供したり、音楽や舞踊のステージを企画・運営したり、催しの提案や人の紹介を行ってきた。今は後輩達が担っているが、お祭り当日は様子を見に足を運ぶ。後輩達を見守り、応援する立場だ。人のつながりで品川区や目黒区のイベントに出向くこともある。

そのような機会にできたつながりから、明樹さんと慧瓊さんは世田谷区が1981年以来「区民健康村相互協力に関する協定」を結んでいる群馬県川場村に招かれ、ソヘグムの演奏をするようになった。新年の祝賀行事に呼ばれ、川場村に暮らす人たちとともに新年を祝う年もある。自然が豊かな村で、四季

折々の楽しみ方ができる。「いなか」がもうひとつできたようで、こうした新しいつながりを大切にしたいと考えている。

近所の同業者から、中小企業の経営者向けの朝の勉強会に誘ってもらった。それも最初のきっかけは、演奏を依頼されたことだった。在日コリアンの自分が参加していいのかなと、すこし不安に思いながら参加したところ、歓迎された。さまざまな業種の人達が集まっているので、視野がぐっと広がった。自営業主が多く、休日バラバラである。日中は忙しいので、朝、勉強をしたり情報交換をしたりする。家族や友人の間では「明樹の朝活（あさかつ）」と半ば好奇の目を注がれている。店を経営していく際に、「自分ひとりで解決なくてはいけない」と思っていたことを、皆が朝からオープンに話して、助言をもらったり、共感しあったり、励ましあったりしていることに驚いた。千里は打ち上げの会場としても喜ばれ、あっという間に明樹さんは組織の世田谷区支部の中心メンバーのひとりになった。

英愛さん：私は朝の勉強会には行かないけど、その会が出している冊子があってそれを読んでいます。なかなかいいことが書いてある。会員は冊子が30冊までもらえるそうで、うちは10冊いただいています。最初は「同じの10冊もいらない」と思っていたんだけど、メニューのうしろに載せておいたら、お客さんが会計の時に「これ（冊子）、一冊もらえますか？」って言うから、「どうぞ」ってさしあげました。そのお客さんは「昔つとめていた会社が、これやっていて懐かしいなって思って」って言ってました。その冊子に「今日の心がけ」という短い文と、それに関する一頁の文章が載っているんです。最近、毎日営業を始める前にスタッフ全員で読んでいます。順繰りに音読するの。最初は「なんですか、これ？何かの宗教ですか？」って怪訝な顔するスタッフもいたんですけど、内容もなかなかいいこと書いてあって、営業を始める前にちょっとみんなで「ああ、なるほど」とか、「へー、そうなんだ」って同じことを考えるというのがいいなって思って、いまのところ続いています。ヒ

エップさん（ベトナム人社員）にとっては、日本語の勉強になっているみたい。漢字って難しいじゃないですか、同じ字でも読み方が違ったりする。それを一日一文、声に出して読むだけで、ずいぶん日本語力の助けにもなっているんじゃないかな。

日常的な話し言葉と文章語は、どの言語でも異なる。日本語を第2言語として学んでいる外国人スタッフについてはもちろんのこと、日本語を第1言語（母語）とするスタッフ達にとっても、知識や語彙力が広がる。またそれを声に出して読むことで、発音や滑舌にも意識が向き、相手に伝えるコミュニケーションの力が高まっているようだと言明樹さんは言う。日本語を第1言語として生まれ育ち、朝鮮学校でルーツの言語を学び、平壤での音楽活動を通して本場の朝鮮語を身につけた明樹さんだからこその視点である。

## 6. OBとしての活動

明樹さんは卒業した東京朝鮮中高級学校（北区十条）の民族管弦楽部後援会の事務局長をしている。長男の侑臣くんも所属している部だが、後援会活動をはじめたのは、侑臣くんが入学するずっと前である。

高校三年生が卒業式の後、千里に食べにくるのが恒例になっている。会長と共に企画し、保護者にも声をかけ、今年は父親達が3人集まってくれた。

明樹さん：今（2025年）からちょうど10年前、日本も少子化が社会問題になっていますが、朝鮮学校はどんどん学生数が減って、一時期、民族管弦楽部の存続そのものが危ぶまれるぐらい部員数が減ったんです。卒業生として、何かサポートしたいと思っても、OB会もないし、組織がないから支援ができない。それで東京朝鮮中高級学校民族管弦楽部後援会を立ち上げました。今年で10年になります。

明樹さんが高校生だった頃は、学年に20人弱の部員がおり、高校全体では

4、50人。大合奏ができた。それが一時期、部員数が10人を下回り、合奏ができなくなってしまった。

明樹さん：個人で練習して技術をあげていくことはできますけど、合奏ができない。子ども達から「合奏したいんだ」という声を聞いて、それかなえてあげたいって思ったんです。それがきっかけです。

明樹さんには、演奏会を企画するノウハウも、その人脈もある。金剛山歌劇団の現役奏者やOB、OG達に「子ども達がやりたいと言っているから集まろう」と声をかけた。当初は後援会ではなく「ファンクラブ」として有志を募ったところ、多くの賛同者を得て70人もの大合奏をすることができた。

猿橋：急に大合奏って、練習とかはどうされたんですか？

明樹さん：それは、OBであれば合奏曲の譜面はもっていますし、揃えることができる。レベルはともかく、現役時代に演奏した経験があるので、「この曲」と言えば各自で練習してきてもらえます。「この曲の指揮者は何期の誰さんです」と言えば、それが懐かしいからと、また参加者が増えたりします。レベルはまちまちですが、金剛山歌劇団の奏者に要所要所に入ってもらいと、それなりに形になるんです。それを10年前に始めて、毎年やっています。そのうち、プロの奏者達の演奏を聞いてもらう時間もプログラムに入れるとか、工夫したりして。

朝鮮学校で人気のある部活はサッカー部やラグビー部など、スポーツ系が多い。最近では、それらの部活にひけを取らないぐらい部員がいる学年もあると言う。

明樹さん：朝鮮学校で恒例の行事、サッカー部とかラグビー部とか規模の大きい部活は、グラウンドに七輪を出して焼肉パーティーをするんです。

それが伝統みたいになっている。民族管弦楽部の子達も「やりたい」って言い出して、焼肉も企画するようになったのが7、8年前です。合同演奏の後、打ち上げの名のもとで焼肉パーティーをする。

猿橋：朝鮮学校に七輪がある？

明樹さん：あります。

英愛さん：子ども達、率先してできるよね。火おこし隊もいて、要領いいもんですよ。焼き方（担当）もいる。

明樹さん：大人達は同窓会みたいになっちゃいますけど、まずは子ども達の声。「合奏したい」から始まって、次は「グラウンドで焼肉やりたい」。

猿橋：それは「グラウンドで」っていうのが大事なんですか？

明樹さん：ありますね。他の学生達に見せつけたいという思い（笑）。それまではスポーツ系の部活だけで、芸術系のクラブで焼肉やったのは民族管弦楽部が一番最初。その後、他の部もやるようになりました。

10年間継続してきて、違いが目に見えるようになってきている。合同演奏会には、他の部活の学生達が鑑賞に来てくれるようになった。それは、演奏会の後で開かれるグラウンドでの焼肉が楽しみなのかもしれないが、そうやって互いに関心をもち、交流が深まっていくことが大切である。そういう関係性、居場所、存在感は一朝一夕にできるものではない。

どんなことでも、継続してやっていると、良い時もあれば悪い時もある。活気で溢れる時期もあれば、停滞している時期もある。どんなに停滞している時期も、諦めたり手放したりせず、守っているとやがてまた息を吹き返す時がやってくる。どんなに下火の時も消失させない、ゼロにしないことがとにかく大切である。

明樹さん：一度、なくしてしまったものを復活させることはできません。

「できない」と言い切ることはよくないですが、一度消えてしまったものを復活させることはとても難しい。それは朝鮮学校を見ていて、痛切

に感じたことなんです。だから、どんなに細々とでもいい、いつかいい時がまたやってくることを信じて、諦めずに絶やさないように努めることがとても大事だと思っているんです。

明樹さんの母校である東京朝鮮第八初級学校は、今はない。

今、経堂にある在日コリアンのためのコミュニティセンターには、東京朝鮮第八初級学校の看板だけが残されている。それは多目的室の入り口を入ったところ、誰の目にも付くところに立てかけてある。



図2：東京朝鮮第八初級学校の看板

東京朝鮮第八初級学校にあったグランドピアノは、校舎を取り壊す前にたまたま明樹さんが救い出し、第九初級学校に移した。以来、そのグランドピアノは学生達が弾いている。活気がある時は、ある程度、放置しておいても構わな

い。翳りが見えた時こそ、細心の注意を払ってよく見守り、自分ができることを探して行動にうつさなくてはならない。世代を超えて継承していくには、そういう対処が必要なのである。

## 7. ソヘグム奏者のパイオニアとして

焼肉千里は世田谷の地で代を継ぎ、親から子へと味を継承している。音楽は、それと対照をなすかのように場所を選ばない。公演活動や指導者としての活動は、日本各地、世界各地で行われる。楽器を携え、必要ならば音響機材一式を持ってどこへでも行く。その際、夫婦の連携、お互いを補い合う協力態勢は欠かせない。

明樹さん：妻は演奏家で、店は忙しい時だけ手伝ってもらっています。一緒にお店をやろうとは考えていなくて、自分ができない分、音楽の道をサポートしてあげたい。第一線でやってくれているので、出演が決まった時にいつでも応じられるように、技をしっかり磨いて。それで、あやかって私も一緒に演奏する（笑）。

明樹さんも毎日ソヘグムの練習は欠かさないが、慧瓊さんの飽くことのない情熱とたゆみない探究は家族の誰かが認めるところである。

音楽コンサートは、クラシックを中心に、話題にのぼればなるべく足を運んで耳を傾ける。コンサートそのものを愉しむというよりは、そこから何かをつかんでソヘグムの演奏にどう活かせるかと考える。それは使命感やプロフェSSIONナリズムから、意識してそう努めているというよりは、自ずとそうになってしまうのだそうだ。

慧瓊さんのソヘグムへの向き合い方について、明樹さんは自分と照らして、以下のように話す。

明樹さん：今になって改めて気づいたんですけど、私は性格上、ひとつを

ずっとやるって向いていないんだなって。妻は一途なんです。楽器さえあれば他は何もいらぬ。ひたすら追い求められる人。見ていて、あんな風に自分はできないなってしまうことがあります。

明樹さんも、ソヘグムの専門家として、ひたすらその道に精進した期間があった。今でも、ソヘグムの第一人者であることに変わりはない。それでも、慧瓊さんと結婚し、慧瓊さんが音楽を追究する姿勢をより間近で見えるようになり、相対的な違いに気づいたということなのだろう。

とはいえ、慧瓊さんは決して独走状態を作り出そうとしているわけではない。明樹さんがメインで演奏する機会に、慧瓊さんが裏方に徹する時もある。受付、客席への誘導、音響の調節、音出し、後片づけ——演奏会をよりよいものにしようと、ひとりで何役もこなす。会場内を見回し、必要なことを見つけては、率先して立ち働く。機械類は苦手なので、音響係、とりわけ音出しを任されると、舞台上で演奏する時以上に緊張するのだと言う。ひととおり演奏を終え、ほっとひと息ついた時、会場内のアンコールの声に、事前に打ち合わせていたのとは違う曲名を明樹さんが口走った。客層やライブ終盤の雰囲気から、急に変更したくなったのだそうだ。「音響さん、大丈夫かな？」とつぶやく明樹さんに音響ブースから背伸びをしてゴーサインを送る慧瓊さん。終了後、「いやー、冷や汗をかきました」と言うが、こんな無茶振りが可能なのも、長年二人三脚で演奏活動が続けてきたからだ。

明樹さん：歌劇団で舞台を作ったり、演奏会を企画から形にしていくなかで、いろいろな音楽家達や音楽以外の役割の人たち、音響さんとか、照明さんとか、いろいろな専門の人たちに出会います。そうすると、職人肌の人もいれば、生粋のエンターテイナーだってしまう人まで、いろんな人がいる。宣伝がうまい人、全体をまとめるのがうまい人。だから、強い味方がいっぱいいるんです。今、私はできること、なんでもやろうと思って、いろんなことをやる。料理を作りながら営業もする、演奏もする。

音楽を一途にやっている人が私の周りにたくさんいる。そういう人たちに機会を作ってあげたい。焼肉で経済的な基盤をもっていたい。そうすれば、必要な時に無理ができる。これは進められないと挫けそうになった時も、うまくあるものを利用して、なんとか実行に移していく。思っ  
ていても動かなければ、形にならないから、形になるように自分は動き  
たいと思っているんです。

東日本大震災の時は自分自身もピンチだった。それでも被災地に慰問の演奏  
に行った。災害で大切な人を失った人、家から家財から、すべて流されてしま  
ったという人もいるのに、音楽なんかやっていていいのだろうかと思問自答し  
ながらの演奏だった。それでも、演奏が終わると「故郷は流されてしまったけ  
れど、あなた達の演奏を聞いて懐かしい風景を思い出すことができました」と  
言ってくれた人がいた。被災地に入っていき、演奏してよかったと思った。不  
安に思って迷っているのなら、実行に踏み切った方がいい。

明樹さんが真面目に実直に、いろいろな役をこなしながら、ソヘグムを芯に  
もって活動するのには、もうひとつ理由がある。

明樹さん：慧瓊も私も活動をしていると平壤に届く。先生の耳に入る。「あ  
なたのお弟子さんが頑張っているねって」聞こえるんじゃないかって  
思うんです。それは、誰かを通じてかもしれないし、『朝鮮新報』は日  
本語版と朝鮮語版が出ているんですが、向こうの大学とか、機関とか  
で、朝鮮語版を読むことができます。自分で読んで見つけることもあれ  
ば、誰かが見つけて「出ていたよ」って教えてくれたこともあったそう  
で、それが本当に嬉しいって聞いたことがあるんです。だから、慧瓊も  
朝鮮大学で非常勤講師としてソヘグムの指導をしているんですが、そう  
いうのに関わっていれば、会えなくても、話せなくても、一方向的なこ  
とかもしれませんが、お知らせが届いて、喜んでもらえるなら頑張っ  
ている意味があるって思うんです。

慧瓊さんは、奏者として舞台に立つかたわらで、いろいろな年齢層の、いろいろな目的意識をもつ人たちのレッスンをしている。朝鮮学校の中学生や高校生たち、大学生、音楽の先生や劇団の奏者たち、ソロでコンクールに照準を合わせている人、ソヘグムを楽しく弾いている 70 代の日本人愛好家と幅広い。

オーケストラの伴奏で演奏してみたいという夢をもっていたが、2022 年、コロナ禍を経てハンアルム管弦楽団と共演をした。ハンアルム管弦楽団とは、音楽による日朝交流を目的に結成され、金剛山歌劇団や神奈川朝鮮吹奏楽団等に所属する奏者やフリーで活動する奏者などの在日コリアンと日本人奏者、混成の楽団である。「ハンアルム」は「両手を伸ばして抱きかかえた時の大きさ、すなわち「ひと抱え」という意味」をもつ。団長の許道鎮氏によると「民族の垣根を超え、みんなが『ハンアルム』の中でひとつの音を奏でていこう」という意思と、『ハン（ひとつ）』の『アルム（美しさ）』を音楽を通じて追求するという意味を込めて」名づけたと言う。

このような特別な機会も嬉しい出来事だが、もっと素朴に、生徒さんが上達したと感じられる瞬間が嬉しい。そして、両親が喜んで応援してくれていることも嬉しい。

慧瓊さん：演奏を聴きに来てくれる。母はお店（焼肉店）をしなくなって、父はまだちょっと経理とか事務を手伝っていますが、ほとんど子ども達に移行しました。（2023 年のインタビュー時）父は 77 歳で、母は 72 歳なのですが、親孝行できています。私が幸せでいることが、両親の幸せ。私も人生を愉しんでいるので、時々電話で話すのですが、私が楽しく話すので「慧瓊と話していると元気が出るわ」と言ってくれます。

ハンアルム管弦楽団との演奏は、東京、神奈川、大阪、北海道で公演が行われた。神奈川公演を聞きに行った英愛さんにとっても特別な演奏会となった。

英愛さん：私の最初の（朝鮮学校の）担任の先生に演奏会のお知らせをしたんです。そうしたら私たちの新聞（朝鮮新報）にとっても心のこもった紹介の記事を書いてくださった。そのお礼をしたいという気持ちもあって、横浜の公演があった時に、同じホテルに泊って朝食をお誘いしたんです。先生ご夫婦と、私たち夫婦、明樹たち夫婦と侑臣、それからお隣さんご夫婦とで。私は新潟に生まれて、群馬の学校に親元を離れて行き、六年生で自分の言葉をはじめて習った。その時の担任の安先生。安先生も先生になったばかりでお若かった。……先生にしてみたら、先生が最初に教えた子どもが成長して、夫婦で頑張って、その子ども達が演奏会を開く。先生の奥様も（朝鮮学校の）先生で、広島でこの人（孝成さん）と同僚で、2つか3つしか違わない。そういうご縁もあって。長年、季節のごあいさつをお送りするだけになっていましたが、六十年ぶりにゆっくりお話をすることができました。朝食をご一緒しただけだけど、感謝を伝えることができました。「これまで大変なこともあっただろうけど、いろんなことが出来たね」って言ってくださって。それは褒め言葉でもあり……。その空間が、私にとって、とってもいい空間で。考えたら、六年生だった私が安先生と出会った、そこが私のルーツの始まりだったんだ。「ああ、こういうことだったんだ」ってね。なんていうのかなあ。その時はわからなくても、辻褄が合うっていうのかなあ……そういう空間に思えたんです。

五年生まで日本の小学校に通い、六年生から朝鮮学校に編入した英愛さん。親元を離れ、「自分の言葉」を12歳で「はじめて習った」。ふり返ってみれば、いろいろなことがあったが、それらがすべて今この瞬間、この空間につながっていると思えたのだと言う。言葉を選びながら、「辻褄が合うっていうのかなあ」と満ち足りた空間の記憶を慈しむように語った。

## 8. おわりに

これまで五部にわたって、河家の在日コリアン百年のファミリー・ライフストーリーを編んできた。一見、「家族史」と銘打っても差し支えない内容に、あえて「ライフストーリー」と掲げた理由のひとつには、ライフストーリー論が依拠する対話的構築主義<sup>2)</sup>に重きをおいたことにある。過去の出来事は、それを体験した者の中に記憶として格納されているものとみなされがちであるが、それが語りとして表出される際には、場の設定、聞き手との関係、聞き方や問いかけ方、さらには少し前に起きたこと、これから取り組む予定、さらに先の将来に向けての展望などの影響を受け、「今、ここ」における一回性の語りとして生み出される。語られた内容、すなわち過去にあった出来事だけではなく、語ること (story telling) という「今、ここ」の営為にも等しく関心を向ける。

社会言語学者でディスコース研究者の Georgakopoulou (2007) は<sup>3)</sup>、過去の出来事について、すでに完結した物語を「大きな物語」とし、現在進行形の未来に開かれた語りを「小さな物語」と区別した。術語に用いた「大きい」、「小さい」に備わる語感から、社会的影響力の大きさの違いと受け取られることもあるが<sup>4)</sup>、もともとの意図は完結性、硬直性、閉鎖性、再現性などへの着目にある。「大きな物語」は、すでに完結されている物語で、何度でも同じように語られる。神話や寓話が、時と場所を問わず、いつでも同じ内容と展開で語られることを想起されたい。

それに対して、Georgakopoulou (2007) が提唱する「小さな物語」は、曖昧な部分があったり、その出来事の意味が語り手にとってもよくわからなかったり、流動的であったりする。語られるたびに異なる方向へ向かったり、他者からの問いかけを受けて、思いもかけない方向に進んでいったりもする。すこし前の出来事や、その場で起きていること、経験していることが即座に語りとなるこ

2) 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房

3) Georgakopoulou, A. (2007) *Small Stories, Interaction and Identities*. John Benjamins.

4) 社会的影響力の大きな語りについては、従前から「マスターナラティブ」の概念がある。

ともある。その場にいる人が、問いかけたり、感想を述べたり、自身の経験の語りを提供することで、語りがその場で生成され、構成されていく。相互行為的な語り、実践としての語り、未完の語り、未来志向の語りのダイナミズムに注目するのが、「小さな物語研究 (small stories research)」ということになる。<sup>5)</sup>

そして、これまでまとめてきた、ひとつの在日コリアン家族の物語を読み進めれば明らかなように、大きな物語と小さな物語は二分法的に切り分けられるものではなく<sup>6)</sup>、常に併存している。本稿から一例を挙げれば、ひとつの演奏会は、在日コリアン二世の崔英愛さんにとっては、来し方をふり返り、「ああ、こういうことだったんだ」と「辻褄が合う」瞬間として語られる。60年間にわたる在日コリアン二世としての人生の歩みについて、意味を伴って完結された瞬間の出来事として語られた。同時に、その演奏会という出来事は、現役の奏者である河明樹さんにとっては、近い将来を見据えながら、試行錯誤のただ中に生きる語りの一部となっている。フリーのソヘグム奏者として活動する現在進行形の中であって、ひとつひとつの出来事の意味はいまだ未知数である。この「未知であること」や「現在進行形であること」は、英愛さんの「完結に導かれた語り」によって際立つ。

「ファミリー・ライフストーリー」には、受け継がれてきた家族の「大きな物語」と、「今、ここ」で実践される「小さな物語」の併存と相互作用、「小さな物語」が語られる過程において展開される相互行為、さらには未来志向を重視するという意図を込めている。

過去に経験した出来事について、その経験そのものを変えることはできない。それらが、現在の自分を縛ったり、あるいは未来の可能性を制限させるものと

5) Schiff, B. (2023). Are small stories another category of narrating? In Georgakopoulou, A., Giaxoglou, K., & Patron, S. (Eds.), *Small Stories Research: Tales, Tellings, and Tellers across Contexts*. (pp. 74-85). Routledge.

6) Georgakopoulou, A. (2015). Small stories research: methods – analysis – outreach. In A. De Fina & A. Georgakopoulou (Eds.), *The Handbook of Narrative Analysis* (pp. 255-271). John Wiley & Sons.

感じられることもあるだろう。しかし、見方を変えれば、それを教訓や座標軸として、未来に活かすこともできる。「今、ここ」のライフストーリーとして、語ることがカタルシスやエンパワメントにつながりうるのは、語ることのその先に何らかの将来展望が見出されるからであろう。その効果は語り手だけではなく、その語りを共に生み出す、すべての語る場への参加者にもたらされうる。言い換えれば、それぞれがもつ「大きな物語」を資源として、いかに共同性をもって「小さな物語」を相互行為的に生み出しうるのか、という課題設定も可能になる。

河家の百年にわたるファミリー・ライフストーリーを記録し、文章にまとめていく作業を通して、対面のインタビューだけではなく、家族の行事、在日コリアンコミュニティ、地域社会とのかかわりの場面や催事に参加する機会を得た。その出会いのひとつひとつ、出来事の場面場面にライフストーリーが付帯している。遠い過去の出来事の語りと、近い過去の出来事の語りが、いかに交叉して近い未来、はたまたはるか先の未来の展望の語りにつながるのか。語りの共同構築者となることは、この社会を「今、ここ」でどう生きているのかについても照らし出す。語りを生み出していく上での共同性は、「語り手」対「聞き手」という対面の関係や役割の関係を後景化させる。その時、ともに見据えられる将来展望も、語りの場に参加する、すべての人に共有のものとなりうるのである。